

日々の臨床でどの程度写真を撮影しているだろうか。歯科技工士は臨床資料が少ない状態で作業を行うことが多く、必要資料を収集することの難しさを痛感している。しかし、写真一枚から読み取れることや伝えられることがあり、チェアサイドとのコミュニケーションも円滑になる。それが結果として、補綴装置をスムーズに製作することにつながり、次の補綴装置の製作につながる。そこで私は進んで写真撮影をすることで、より多くの情報を得て、資料を自分で整理し活用するようにしている。

第一部では、『一眼カメラの教科書』と題しカメラの基本操作、基礎知識、各種設定、などベーシックなところを解説する。

カメラの各ボタンの意味、メーカーの違いによる写真の写り方の違い、写真を撮影する上で考えなければならない露出（F値、シャッタースピード、ISO感度、ホワイトバランス）の詳細。これから写真をはじめの方のために、10万円以下で揃えることができる歯科用カメラキットも紹介する。

第二部では、『Attractive shooting method -魅せる写真の撮影法-』と題し実際の撮影テクニックを解説する。

歯科雑誌や海外臨床家のプレゼンテーションで美しい写真や演出に心を奪われた方はいないだろうか。心を奪われたひとりである私は、同じように撮影できないものかと考え、これまで試行錯誤してきた。書籍では具体的に載っていない撮影環境やフラッシュの使い方、省スペース撮影、など明日から誰でも使えるワンポイントテクニックをお話したい。

今回は私が普段臨床で行なっている写真撮影について「伝える写真」、「魅せる写真」という項目で紹介していきたい。伝える写真とは、画角、撮影角度、ホワイトバランス、フォーカス位置、カメラ（色が重視される場合）が全て同じ条件で撮影された規格性の高い写真。記録を整理することにより、参考模型ではわからない情報が確認可能になり歯科医師とのコミュニケーションにおいても有益なものとなる。

一方、魅せる写真とは、カメラ、レンズ、フラッシュ等の設定や構図を駆使して、実際に壊さない程度に補正した審美性などの要素を含む写真。補正をすることにより、見せたいものへ視線が行くことでより情報が伝達可能となる。アート性に富んだ美しい写真を見ることで術者の感性豊かな仕事ぶりが伝わる。

なお、ここでの補正とは、セラミックで補綴された歯を隣在歯の色に合わせて色味を変更することや、歯頸線の位置を変更する等の加工ではない。

一部、二部を通して聴くことで写真撮影の参考になれば幸いである。規格写真による「伝える写真」と編集を用いた「魅せる写真」で、チェアサイドとのコミュニケーションレベルが確実に向上する。資料を積極的に撮るようになることで、自身の技術向上となり、補綴装置の付加価値を高める。

近年はスマートフォンカメラの発展も著しい。一眼レフカメラのない方でも気軽な気持ちで写真撮影を始めてはいかがだろうか。